

---

# 心小町 - ココロコマチ -

Temachi

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

心小町 - ココロコマチ -

### 【Nコード】

N8319J

### 【作者名】

Temachi

### 【あらすじ】

この町に住んでいる小学生の心ちゃん（通称コロちゃん）の日常の物語。文章形式はショートショート。完結を意図した作品ではありません。

## マチビト

たとえ雨が降っていても、昼でも夜でも、その男はそこに佇んでいた。

「こんにちは、おじさん。」

私は声をかけた。

「やあ、こんにちは。珍しいね。私に声をかける人間なんて久しぶりだ。」

男は驚いたように、それでいて少し嬉しそうに言葉を返した。

「いえ、とても寂しそうに座っていたので。」

私は言った。

すると男は、

「ならば、私のしゃべり相手になってくれるかい？」

と言ったので、私は、

「ええ、暇なときにいつでも。」

と返した。

すると男は ハハハッと笑った後、

「そう言って次の日から1度も現れなかった人間など、いくらでも見てきたよ。」

と言った。

私は、 たしかに とうなずいた後

「ここでいつも何をしているのですか？」  
と聞いた。

男は少し間を置いて、

「実はね、ここである者をずっと待っているのだ。」

男は言った。

「待ち合わせしてたんですか？」

私は聞いた。

男は首を横に振った。

「いや、ここに置いていかれたのさ。かれこれもう15年にもなる。」

男は空を見上げて言った。

「ずいぶん長いこと置き去りにされたんですね。」

私は感心するように言葉を返し

「ところで、誰に捨てられたんですか？」

と、聞いた。

「まだ1歳にもならない幼き赤ん坊だった。」

男は言った。

「赤ん坊ですか？」

私は聞いた。

「うむ。赤ん坊だ。」

毎日アイツとの日々は楽しかった。私たちはいつも一緒だった。だが……。

あろうことかアイツは私をここに埋め、置き去りにしていったのだよ！」  
と言った。

「へえ、ずいぶん珍しいお話ですね。」  
私は言葉を返した。

「うむ、そうだろう。いつも皆、この辺で逃げるように去っていくのだ。」

しかし、お主は逃げずに聞いてくれた。私は君に贈り物をしたい。」  
男はそう言って、自分が座っている真下の地面を指差した。

「ここを掘ってみてくれ。」  
男はそう言つとそこから立ちあがった。

私は地面に手をついて、そして土に手をめり込ませた。

少し土を掘り起こすと、そこから出てきたのは”ポチ”と字が書かれた大きな”骨”だった。

「骨が出てきましたよ？」  
私はそう言つて顔をあげた。

しかし、先ほどの男はもうそこにはいなかった。

私は、少し首を傾げつつ、”骨”を草むらに投げつけた後、口笛を吹いて帰った。

## 草のお墓

この日、私とママはお庭に生えた雑草を退治していた。

私は、庭の真ん中に生えた大きな雑草に手をかけた。

そしてそのまま思いきり草をひっぱる。

「えい！」

ぶちっ

「痛い！」

草は地から抜けず、葉がちぎれた。そして、同時に声も聞こえた。

ふりむくと、一人の少年が私の後ろでへたりこんでいた。

「な、なに？」

私は、おどろいた。

少年はよく見ると、片腕がなかった。

少年は言った。

「その草、抜くのをやめてくれないか？」

私は首を横にふった。

「こんな大きな草を庭に残したままにしちゃったら、ママに怒られちゃうよ。」

しかし、少年は泣きつくように言った。

「お願い！考え直して！」

ほら、この草をよく見てよ。

この瑞々しい葉っぱ、丈夫な茎、深く張った根っこ、すばらしいと思わない？」

私はそれを聞いて、少し考え直した。

「そう言われてみればすごい草なのかも。」  
私はじつくりと草をみた。

しかし、それはどこからどう見ても、ただの雑草である。

「・・・。」

「・・・。」

2人は沈黙して見つめ合った。

「コロ サボっちゃ駄目よ。」

いつのまにか、ママが私の前でたっていた。

そして、ママは草を見下ろし、言った。

「まあ、こんな大きな草を放置しないでよね。」

ママは草をつかみ、おもいきり力をいれた。

「あ、ママ！ちょっと抜くのはまって・・・。」  
私は静止しようとした。

だけど、もう遅かった。

ズボズボ―

「ぎゃー―――！」

少年の声が庭中に響いた。

草は引っこ抜けた。

振り返ったそこに、少年はもういなかった。

私は、その草を拾い上げると庭裏の森のそばに埋めてあげた。



## 掃除の心

「コロ、たまには部屋の掃除をしなさい。」

ママは私に言った。

「えー、やだ。めんどうだし。」

私はそう言つと、漫画を読みながらコロコロと転がって見せた。

「はあゝ・・・。」

ママは大きなため息をついた。

そして、

「これだけはしたくなかったのだけど・・・。」

とつぶやいて、私の目の前に2台の掃除機をドンっとおいた。

「ママ、それで一緒に掃除しようって言つたの?」

私は漫画を置き、ママを見て言った。

するとママは首を横に振って、

「これからコロは掃除機と合体してもらいます!」

ママは言った。

「合体するとどうなるの?」

私は聞いた。

「腕が2本、掃除機のホースになって、掃除しかできない体になるのよ。」

ママは言った。

私はすごく嫌な顔をして、

「吸い込んだゴミが体に入ってくるから嫌だよ。」  
と返した。

するとママは、

「ちよつと中身が汚れるくらい、この際しょうがないことなのよ。」  
と言った。

私は不貞腐れた顔をして、

「中身って何が汚れるの？」  
と聞き返した。

ママは、

「心がちよつと汚れるだけよ。」  
と微笑みながら返した。

ママはとても私を掃除機人間にしたそうにしていたので、しゅしゅ  
私は部屋の掃除をすることにした。

## 腕泥棒

「すいません……。腕をなくしたんですが、お嬢さん、知りませんか？」

片腕のない小柄な男が尋ねてきた。

「腕なんて簡単になくすものなんですか？」  
私は聞いた。

「ええ、見てください。」

男はそう言うと、私の腕を掴んだ。

そして、少し捻るように力を入れると、私の腕はぽろりと取れてしまった。

「あ、簡単ですね。」

私は言った。

「そうなんですよ。僕が歩いていたらいつの間にか取れてしまっ  
て……。」

男はそう言いながら私の腕を物色し始めた。

この腕、ちょうどいい大きさ、これならなんとかなるでしょう。こ  
の腕、もらっていいですか？」

男は言った。

男は私の腕を愛でるように抱かかえた。

「でもそれ、私の腕ですよ？」

私は言った。

「大丈夫ですよ。」

男は嬉しそうに言った。

男は、私の手をなくしたほうの肩に力チャリとはめこんだ。

「ほらサイズもびったり。」

男はそう言つと、少しずつ後退し始めた。

そして突然、大急ぎで逃げてしまった。

「ちよつと！私の腕！！」

私はすぐに男を追いかけた。

しかし、子供の私の足ではすぐに突き放され見失ってしまった。

「くそ。今度あったときはあいつの首をもいでやる！」

私は大声で叫んだ。

そういえば、なぜあんなに簡単に腕が取れたのだろう。

私は、自分の体を見てみた。

なぜか、自分の体はマネキンのように見えてきた。

## 校長の銅像と二ノ宮金次郎

今日は少し帰りが遅くなってしまった。

私は暗くなりつつある空を見上げながら足早に校門をくぐろうとしたときだった。

ボカボカ

二宮金次郎の銅像と、校長の銅像が、石台の前で殴り合っていた。

私は立ち止まって横目で見ていた。

二宮金次郎は、校長の銅像の左腕を持つと、手にもった本で左腕をおもいきり叩いた。

すると校長の銅像の左腕は、バキリと折れてしまった。

そのまま二宮金次郎は校長の銅像に殴る蹴るの暴行を加える。

私はぼうっとその光景を見ていたが教室に忘れ物をしたことに気がついて、一度校舎に戻った。

私が校舎内に入ると、校長先生とすれ違った。

何故か校長先生は血だらけで、よく見ると左腕がなくなっていた。

私がじろじろ見ていると、校長先生はキリッとした目で睨み返し、

「なんだね、なにか用かね？」  
と言った。

私はすぐに、

「ごめんなさい。」

といって目をそらした。

そして校長先生は痛そうにもせず、キビキビと歩いて校長室に入っ  
ていつてしまった。

私は、忘れ物の荷物を手に持って、また先ほどの校門の前にある石  
台の前に来た。

今度は、何事もなかったかのように静寂に包まれていて、石台の上  
には二宮金次郎がひっそりと立っていた。  
ただ、その石台の周囲に散らばっている銅像の破片が私には気にな  
った。

## 韓国人と金魚

私はこの日、韓国のお友達の家遊びに行った。

家にお邪魔すると、金魚が目に入った。

何匹もの金魚が優雅に泳いでいる

「あ、金魚、かわいいなあ。」

そういうと私は水槽に近寄った。

しかし、金魚はどことなく変だった。

唇がどす黒く、大きく腫れていた。

「ちょっとこれ大丈夫なの？」

私は聞いた。

「大丈夫だよ。こういうヤツなの。」

友達と言った。

「新種？」

私は聞いた。

「どうだろう、買ったときは普通の金魚だったけれど。」

友だちはそう言って考え込んだ。

私たちが玄関でグタグタやっているのに気がついたのか、金魚は水

面まで上がり、口をパクパクし始めた。

「金魚、餌ほしがってる？」  
私は聞いた。

「そうかも、今朝あげてなかったし。」  
友達は答えた。

友達はおもむろに小さな袋をとりだし、水面にパラパラと蒔く。  
しかし、蒔いた餌は、なぜか赤色をしていた。

「ねえ、餌赤いよ！」  
私は言った。

「そりゃ赤いよ、唐辛子なんだから。」  
友達は答えた。

「唐辛子やっていいの？」  
私は聞いた。

「大丈夫、韓国の金魚だから。」  
友達は平然と答えた。



## 男とロケット花火

この日、一人の男性が私の家を訪ねてきた。

「すみません、ロケットをください。」

男は私にこう言った。

「ロケットなんてありません。」

私は答えた。

「そんな！どこの家庭にもあると聞いてきたんですよ？」  
男は必死な顔で言った。

「あるわけないでしょ。」

私は鬱陶しそうに答えた。

「うう、私の宇宙計画がこんなところで・・・。」  
そう言うと、男は地面にへたれこんだ。

ふと、玄関の靴棚の上においてあった袋が落ちた。

袋は男の目の前に落ちると、男は目の色を変えてそれを拾い上げた。

「こ・・・これだ！私の探していたものは！」  
そう言うと、それを拾い上げ、私に見せた。

それは、ただのロケット花火だった。

「それで飛ぶ気ですか？」  
私は聞いた。

「はい！コレを探していました！」  
男はうれしそうに答えた。

「わかりました。それはあげます。」  
私がそう言うと、

「ありがとうございます！これで宇宙に行って参ります！」  
と、最高の笑顔で答えた。

私も、  
「がんばってそれでハジけてきてください。」  
と、できる限りの最高の笑顔で男を見送ってあげた。

ヒュルルルルルー パアン！  
夜、庭からロケット花火が大空に飛び、そして弾ける音が聞こえた。

## ママの卵料理

下校途中、道の真ん中にたまご型で手足の生えた生き物がバタバタともがいていた。

私は、その生き物に近づいていった。

それは目があって、手足があって、カラフルだった。

「なにこれ、ハンプティダンプティ？」

私は声に出した。

すると玉はコチラに向き返り、うれしそうに言う。

「おお、よくわかったな！早く起こしてくれ！！」  
ハンプティダンプティは答えた。

「起こしませんよ。どうせ起きないんですから。」  
私は言った。

するとハンプティダンプティは、  
「どうしてそんなことがわかる？やってみないとわからないだろう  
！」

と怒った表情で言うと、バタバタと手足をばたつかせた。

「でも未来は決まってるんです。」  
私は言った。

「うるさあい！立たせる！立たせる！立たせる！」  
ハンプティダンプティは騒ぎ立てる。

見かねた私は無視して通り過ぎようとした。

しかし、そこに突然ママが現れた。

「コロ、ちょっとまちなさい。その卵を家までもっていくのよ！」  
ママは言った。

「こんなモノどうするの？」  
私はママ聞いた。

「食べるにきまつてるでしょ！」  
ママは堂々と答えた。

「はあ？」

この日のメインディッシュはハンプティダンプティ料理だった。

その味は、どこか懐かしい、母の味だった。

## チョコレート仮面とブルマ

その男は、すっぱんぽんで私の目の前に現れた。

「お嬢さん、着るものを何か持っていないかい？」

男は言った。

男はオペラ座の怪人のような”仮面”をつけた、茶色い肌をしたムキムキマツチョコな男であった。

「持つてません。」

私はきっぱり答えた。

「しかし、何か着なければ私はこの仮面で大事なところを隠さねばならなくなるではないか。」

男は照れくさそうにいった。

「それで隠せばいいのでは？」

私は聞いた。

「いやいや、いけないのだ。たとえリングの上でパンツをはがされようとも仮面だけは外せない。」

そういつて、男は私をじつと見た。

そして突然、男は目を大きくして、私を指差した。

「そのランドセルの中に入っているモノは！ランドセルを！ランドセルを開けてくれ！」

男は急かすように言った。

私はランドセルを開けた。

ランドセルの中に入っていたのは、今日学校の体育で穿いていた”ブルマ”であった。

「間違いない！それは伝説のレスリングパンツだ！それを私にいただけないだろうか！」

男は私に迫った。

私は小さくうなづいて

「交番に立ち寄ってくださいれば差し上げます。」  
と言葉を返した。

男はうれしそうにうなづいて、私からブルマを受け取ると、その場で穿いてしまった。

「このご恩は一生忘れない！」

私の名はチヨコレート仮面！プロレスラーだ！今夜、是非私の活躍を是非見ていただきたい！

では、さらばっ！」

男はそういい残り、立ち去っていった。

その夜、プロレス番組を見てみたのだが、やはりチヨコレート仮面の姿を見ることはできなかった。

## プチ整形

私が学校の廊下を歩いていると、前からクラスのやんちゃな男子たちが騒ぎながら走ってきた。

私がお上品に横に避けたのだが、男子たちはそれもお構いなしに私を突き飛ばした。

ガツン

突き飛ばされた私は、そのまま廊下の壁に、顔をうちつけてしまった。

ポトポト

それと同時に目、鼻、口、耳などが地面に落ちる。

「ああ、せっかく今日の朝、きれいに輪郭セツトしたのに台無しだよ。」

私はそう言つと、目 鼻 口などを拾いあげ、顔の適当な場所につけてトイレに駆け込んだ。

「ちょっと釣り目に見してみようかな。」

私は目や口をいじった。



## 消しゴム

授業中、隣の席の安芸君は一生懸命何かを消しゴムで消していた。

「何を消しているの？」

私は聞いた。

「そうだなあ。」

安芸君は考えた。

「まずは森先生かな。」

安芸君は答えた。

「森先生を消せるの？」

私は聞いた。

「ああ、見てくれ。」

安芸君は”先生”と書き、それを消し始めた。

「な、なんだ!？」

突然、森先生は大きな声をだした。

そして、

「ぎゃーーーーー!!!」

という悲鳴とともに消滅していった。

「すごい。」

私は言った。

「すごいだろー。」

安芸君はうれしそうに答えた。

調子がよくなった安芸君は、

「今度は母さんを消してやる。」  
と言った。

「母さんも消せるの？」  
私は聞いた。

「ああ、なんだって消せるさ。今から消してやる。」

そう言って、安芸君は”心の母さん”と書かれた文字を消し始めた。

消し終わると安芸君は嬉しそうに、

「よし、家に帰って確認してみてよ。絶対消えてるから。」  
と自慢げに言った。

私は早退して家に帰った。

裏口を空けて家に入ると、ママはいつものように料理をしていた。

「あれ？ママいるんだ。いないと思ったのに。」

私はママに言った。

「なにいつてるの。私はいつも家にいるでしょー。」  
ママは答えた。

「そりゃそうだよなー。」

私はそう言いながら、少し考えた。

「ねえ、ママ。」

ママって、自分がママっていう自覚ある？」

私の問いに、ママは即答した。

「ない！」

## チヨコレート仮面と悪者退治

今日、私はピンチだった。

「キャー！！！！」

私は大声を上げた。

私は、悪党たちに取り囲まれていた。

悪党たちは、鋭い刃物をたくさんちらつかせ、そして大勢で私を取り囲む。

私は、もうだめ。今日この瞬間に終わってしまうのだ。

そう、覚ったその時だった。

「てええええええい！」

そんなむさ苦しい掛け声とともに、突然現れた男はプロレス技を炸裂させた。

男は強靱な胸板で、次々に悪党たちをやっつけた。その速さといえは、一瞬であった。

「ありがとう！チヨコレート仮面！」

私は言った。

「姫君のピンチとあらば、私はどこからでも駆けつけましょう。」  
チヨコレート仮面は言った。

私はそのまま走りよって、そのむしゃぶりつきたくなるような胸板に抱きついた。

素敵な素敵な恋の予感。

「チョコレート仮面、こんな普段人気のない殺風景な場所で、こんな素敵な登場をするなんて、なんて素敵なんでしょう。」  
私は言った。

チョコレート仮面は誇らしげに下半身を指差し言った。

「これ」を身につけていたから、君のピンチに気づけたのだよ。」

”これ”とは、ブルマだった。

先日の、私のブルマだった。

「まだ身につけていたのですね。」  
私は言った。

「うむ、やはりこれがいいのだ。マスクは剥がされてもいいが、パ  
ンツだけは剥がされるわけにはいかぬ。」  
チョコレート仮面は誇らしげに言った。

私は、道を踏み外す一歩手前で気づかせてくれた素敵な自分のブル  
マに一礼をして、あとは振り返らずに走って帰った。

## キレイな小石

帰り道、私はキレイな小石を拾った。

薄っぺらく、ツルツルの表面。うつすら透けていて、青みがかつた石だった。

私はそれを、拾ってポケットに入れた。

少し歩くと、私は声をかけられた。

「もしもし、お嬢さん。」

私は、振り返った。そこには見知らぬおじさんが立っていた。

「もしもし、お嬢さん。さきほどあなたはキレイな小石をポケットから落とされましたよ。」

そういつて、おじさんは自分の足元を見つめていた。

足元には、さきほど拾った小石が落ちていた。

私はおじさんの立つ下にかがみこんで、小石を拾い上げた。

そして、私は、

「ありがとう。」

と言いながら顔を上げた。

しかし、先ほどまで目の前にいたはずのおじさんは、何故かいなくなっていた。

私は、少し首を傾げた後、先ほどの小石をぽっけにしまいなおし、また歩き始めた。

「よし、ついた。」

私は、通学路から少し外れた用水地にきていた。

私はポケットから先ほどの小石をとりだした。

そして、腕を地面すれすれに構え、

「それえ〜！」

投げた。

ヒューン ピシャピシャピシャシャシャ

「おー、はねるはねる！」

小石は何度もバウンドしながら、そして最後は静かに水の中に沈んでいった。

「うんうん、おもったとおり。拾ったときからあの石は絶対はねる

「思ってたんだ。」

私はそう言っ、小石が沈んでいった水面を見つめていた。

じつと、見つめていた。

青く光る水面からは、誰かが溺れてるような、そんな声が聞こえた気がした。



## 液状テレビ

家に帰ると、いつもテレビが置いてある場所に、水の張ってある水盆が置いてあった。

「何この水盆？」

私は家事をしているママに問いかけた。

「何って、液状テレビよ。高かったんだから液をこぼさないでよね。」

ママは答えた。

「これが液晶テレビ!？」

私はママに聞いた。

「違うわよ、液状テレビ。ほら、覗いてみなさいよ。」  
ママは答えた。

私は、水盆を上から覗き見た。

たしかに、水にはテレビの映像が映っていた。

「でもコレ。不便じゃない？」

私の問いに、ママは答えなかった。

からっぽけつと

”ぽけつと”の中はからっぽだった。

それでも、私は”ぽけつと”の中で何かを握っていた。

秋の空は青くて高く、風は北風。木枯らし3度目。明日は雪でもふるだろう。分厚いコートも網のように風を逃がし、私の体を震わせた。

私は”ぽけつと”に手を突っ込んで、そして握りこぶしをしていた。

寒くて寒くて私は体を震わせていた。

けれども私は暖かくって、そして幸せだった。

私は、高い空を見上げつつ、ずんずんと歩いていた。そんな時だった。

わあっ

私は声を荒げた。突然、子狐が飛び掛ってきたのだ。

私はバランスを崩した。そして”ぽけつと”から手をだして、受身をとった。

その瞬間、思った。

あ、盗まれた　　って。

子狐はそのまま立ち止まらず、振り返らず、山に消えていった。

私は、立ち上がり”ぽけつと”に手を突っ込んだ。

さきほどまで暖かったはずなのに。それなのに。

ぽけつとは冷え切っていた。

## 夢の続きは

朝、私は目が覚めてすぐにもう一度、夢の世界へダイブした。  
先ほど見ていた夢が気になってしょうがなかったから。

しかし、夢には見知らぬじじいが一人出てくるだけ。

じじいは言った。

「そんなに夢がみたいなら、ずっと見ているがいい！」

私は、じじいにそう言われるとすぐに飛び起きた。

「わああー！」

私は叫びながら階段を駆け下りた。

「ママ！たいへん！私、夢から覚めなくなっちゃった！」

私はそう言いながら、台所で朝食を作るママに駆け寄った。

「おはよう、小春。  
パシンッ

ママは挨拶と同時に私をひっぱたいた。

「ママ痛いよ。」

私は言った。

「本当に？」

ママは私に聞いた。

私はほつぺを触って感触を確かめながら答えた。

「嘘、痛くない。」

私がそう答えると、今度は手に持った包丁を私に突き刺した。

ズブリ

血がボタボタとこぼれた。

「ママ痛いよ。」

私は言った。

「本当に？」

ママは私に聞いた。

私は突き刺さった包丁を抜き差しして感触を確かめながら答えた。

「嘘、痛くない。」

「小春、2度寝すればいいんじゃないかしら？」

ママは言った。

「なるほど、やってみる。」

私もそれに納得して布団に戻った。

布団に入ると、私は目を瞑り、眠くなる呪文を唱えた。

私は、すぐに眠くなってしまって、

すぐ眠りについた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8319j/>

---

心小町 - ココロコマチ -

2010年10月10日15時19分発行